

平成31年度  
入学試験問題

第2回

国語

- 1 問題用紙は監督者<sup>かんとくしや</sup>の指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点<sup>くとうてん</sup>や符号<sup>ふごう</sup>は一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから15ページまであります。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

森村学園中等部

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「柔よく剛を制す」という言葉がある。

見るからに強そうなもの強いとは限らない。柔らかく見えるものが強いことがあるかも知れないのである。

昆虫学者として有名なファーブルは、じつは『ファーブル植物記』もしたためている。その植物記のなかで、ヨシとカシの木の物語が出てくる。

ヨシは水辺に生える細い草である。ヨシは突風に倒れそうになったカシの木にこう語りかける。カシはいかにも立派な大木だ。しかし、ヨシはカシに向かってこう語りかける。

「私はあなたほど風が怖くない。折れないように身をかがめるからね」

日本には「柳に風」ということわざがある。カシのような大木は頑強だが、強風が来たときには持ちこたえられずに折れてしまう。ところが、細くて弱そうに見える柳の枝は風になびいて折れることはない。弱そうに見えるヨシが、強い風で折れてしまったという話は聞かない。柔らかく外からの力をかわすことは、強情に力くらべをするよりもずっと強いのである。

柔らかいことが強いということは、若い読者の方にはわかりにくいかも知れない。正面から風を受け止めて、それでも負けないことこそが、本当の強さである。ヨシのように強い力になびくことは、ずるい生き方だと若い皆さんは思うことだろう。

しかし、風が吹くこともまた自然の摂理である。風は風で吹き抜ければならない。①自然の力に逆らうよりも、自然に従って自分を活かすことが大切である。

この自然を受け入れられる「柔らかさこそ」が、本当の強さなのである。

\*オオバコは、柔らかさと硬さをあわせ持つて、踏まれに強い構造をしている。

しかし、オオバコのすごいところは、踏まれに対して強いというだけではない。

オオバコの種子は、雨などの水に濡れるとゼリー状の粘着液を出して膨張する。そして、人間の靴や動物の足にくっついて、種子が運ばれるようになっていくのである。オオバコの学名はPlantago。これは、足の裏で運ぶという意味である。タンポポが風に乗せて種子を運ぶように、オオバコは踏まれることで、種子を運ぶのである。

よく、道に沿ってどこまでもオオバコが生えているようすを見かけるが、それは、種子が車のタイヤなどについて広がっているからなのだ。こうなると、オオバコにとつて踏まれることは、耐えることでも、克服すべきことでもない。もはや踏まれないと困るくらいまでに、踏まれることを利用しているのである。

「逆境をプラスに変える」というと、「物事を良い方向に考えよう」というポジティブシンキングを思い出す人もいるかも知れない。しかし、雑草の戦略は、そんな気休めのものではない。もっと具体的に、<sup>②</sup>逆境を利用して成功するのである。

- A しかし、雑草は違う。
- B たとえば雑草が生えるような場所は、草刈りされたり、耕されたりする。
- C つまり、ちぎれちぎれになったことよって、雑草は増えてしまうのである。
- D ふつうに考えれば、草刈りや耕起は、植物にとっては生存を危ぶまれるような大事件である。
- E 草刈りや耕起をして、茎がちぎれちぎれに切断されてしまうと、ちぎれた断片の一つ一つが根を出し、新たな芽を出して再生する。

また、きれいに草むしりをしたつもりでも、しばらくすると、一斉に雑草が芽を出してくることもある。じつは、地面の下には、膨大な雑草の種子が芽を出すチャンスをお伺っている。一般に種子は、暗いところで発芽をする性質を持っているものが多いが、雑草の種子は光が当たると芽を出すものが多い。

草むしりをして、土がひっくり返されると、土の中に光が差し込む。光が当たるということは、ライバルとなる他の雑草が取り除かれたという合図でもある。そのため、地面の下の雑草の種子は、チャンス到来とばかりに我先にと芽を出し始めるのである。

こうして、きれいに草取りをしたと思っても、それを合図にたくさんの雑草の種子が芽を出して、結果的に雑草が増えてしまうのである。草刈りや草むしりは、雑草を除去するための作業だから、雑草の生存にとっては逆境だが、雑草はそれを逆手に取って、増殖してしまうのである。何というしつこい存在なのだろう。

そんなしつこい雑草をなくす方法など、あるのだろうか。

じつは、一つだけ雑草をなくす方法があると言われている。それは、あろうことか「雑草をとらないこと」だという。

雑草は、草刈りや草取りなど逆境によって繁殖する。草取りをやめてしまえば、雑草だけでなく、さまざまな植物が生えてくる。そうになると、競争に弱い雑草は、立つ瀬がない。だんだんと大きな草が生え、やがて、灌木が生えてくる。そして、長い年月を経て、森となっていくのである。人の手が入らなければ、いわゆる「遷移」が起こるのである。競争に弱い雑草は、大型の植物や木々が生い茂る場所では、生存することができない。そして、ついに雑草はなくなってしまうのである。

③ 本来に雑草は弱くて強い存在であり、また強くて弱い存在なのだ。

もつとも、首尾よく雑草はなくなつたとしても、そこはうつそうとした森になつてしまうから、畑や庭の雑草をなくす方法としては現実的

ではない。

先に、日本タンポポが他の植物に先駆て、花を咲かせることを紹介した。このように、小さな雑草の中には、春先に花を咲かせることで成功するものが多い。

しかし、春に花を咲かせるためには、必要なことがある。それは冬の間も葉を広げるということである。春に花を咲かせる植物たちは、寒い冬の間も葉を広げている。そして、光合成で得た栄養分を、蓄えていくのだ。

寒い冬に、霜に当たりながら、葉を広げることが植物にとって簡単なことではない。本当は温かな土の中で種子で眠っていた方が、ずっと安全である。しかし、春になって地面の下で眠っていた種子たちが起きだすころには、冬の間も葉を広げていた小さな雑草たちは、蓄えた栄養分で一気に花を咲かせる。そして、他の植物が伸びる前に、さつさと種子を残してしまふのである。

まだ肌寒い中に花を咲かせている小さな野の花に、私たちは春の訪れを感じる。しかし、私たちに春の訪れを感じさせてくれる野の花たちは、必ず、冬の間も葉を広げていた者たちである。

これらの植物にとって、冬は耐える季節ではない。強い植物が土の中で眠っている冬という季節があるからこそ、彼らは花を咲かせ、成功することが出来る。

もし、一年中、暖かで快適な気候だったとしたら、小さな野の花たちが花を咲かせることはできなかつたかも知れない。そうだとすれば、寒い冬は、春に咲く小さな野の花にとって、不可欠なものであるとも言える。そして、冬の寒さこそが成功のために味方なのである。

「ピンチはチャンス」という言葉がある。逆境を逆手に取って利用する雑草の成功を見れば、その言葉は説得力を持って私たちに響いてくることだろう。

ピンチとチャンスは同じ顔をしているのである。

生きていく限り、全ての生命は、何度となく困難な逆境に直面する。雑草は自ら逆境の多い場所を選んだ植物である。しかし、逆境のまったくない環境などあるのだろうか。雑草がこれだけ広くはびこっているのを見れば、自然界は逆境であふれていることがわかるだろう。

逆境に生きるのには雑草ばかりではない。私たちの人生にも逆境に出くわす場面は無数にある。そんな時、私たちは道ばたにひっそりと花をつける雑草の姿に、自らの人生を照らし合わせてセンチメンタルになるかもしれない。しかし、雑草は逆境にこそ生きる道を選んだ植物である。そして逆境に生きる知恵を進化させた植物である。

けっして演歌の歌詞のようにしおれそうになりながら耐えている訳でもないし、スポ根漫画の主人公のようにただ歯を食いしばって頑張っているわけでもない。雑草の生き方はもっとたくましく、そしてしたたかなのである。

「逆境は敵ではない、味方である。」これこそが、雑草の成功戦略の真骨頂ましかうていと言えるだろう。

幾多いくたの逆境を乗り越えて雑草は生存の知恵ちえを獲得し、驚異きやうい的な進化を成し遂げた。逆境こそが彼らを強くしたのである。そして、逆境によつて強くなれるのは雑草ばかりでない。私たちがまた逆境を恐れないことできつと強くなれるはずなのである。

①「ピンチはチャンス。」

ゆめゆめ逆境を恐れてはいけないのだ。

(稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか』より)

(注) \*自然の摂理……自然界を支配している法則。

\*オオバコ……雑草の一種。

\*耕起……農業において、土を掘り返したり反転させたりして耕すこと。

\*灌木……低木のこと。

\*遷移……ある場所の植物群落が長い年月の間に次第に別の群落に変わってゆくこと。

\*スポ根漫画……スポーツにひたすら打ち込み努力を重ねる主人公の姿を描いた漫画。

\*真骨頂……そのものが本来もっている姿。

問一 —— ①「自然の力に逆らう」とありますが、これと同様のことを述べている十字の表現を—— ①以前の本文中からぬき出しなさい。

問二 —— ②「逆境を利用して成功する」とありますが、オオバコについて言えば、どういうことですか。その説明として最も適当なものの中から選び、記号で答えなさい。

ア 柔らかさと硬さをあわせ持つことによつて、踏まれに強い構造をしていること

イ 種子がゼリー状の粘着液を出すことによつて、靴や足にくっつきやすくなっていること

ウ 人間の靴や動物の足に踏まれることによつて、種子を遠くまで運ぶこと

エ 人間や動物に踏まれることに耐えながらも、道に沿って生えることができること

問三 本文中のAからEの文を正しい順序に並べ替えた場合、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア B↓D↓E↓A↓C      イ B↓D↓A↓E↓C  
ウ D↓A↓B↓E↓C      エ D↓A↓B↓C↓E

問四 「あろうことか」……「首尾よく」の意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「あろうことか」

ア 当たり前と言われればその通りだが

イ 実際にはよくあることなのだが

ウ 本来あつてはならないことなのだが

エ まさかと思われるかもしれないが

b 「首尾よく」

ア うまいぐあいに

イ 最後までですつかり

ウ 思いどおりに

エ 幸運なことに

問五

③「雑草は弱くて強い存在であり、また強くて弱い存在なのだ」とありますが、次にあげる①から⑤について、「弱くて強い存在」にあてはまるものにはアで、「強くて弱い存在」にあてはまるものにはイで、どちらとも言えないものにはウで答えなさい。

- ① 雑草の種子には光が当たると芽を出すものが多い。
- ② 大型植物が生い茂る場所では雑草は生存できない。
- ③ 草取りをやめてしまうと雑草はなくなってしまう。
- ④ 雑草も大型植物と同様に光合成で栄養分を蓄えていく。
- ⑤ 春先に花を咲かせる野の花は冬の間も葉を広げている。

問六 —— ④「冬の寒さこそが成功のために味方なのである」とありますが、日本タンポポにとって「冬の寒さ」が「味方」であると言えるのはなぜですか。その理由を六〇字以上七〇字以内で具体的に説明しなさい。

問七 —— ⑤「雑草は自ら逆境の多い場所を選んだ植物である」と筆者は述べていますが、雑草が逆境と呼ばれるような厳しい環境で生育するのは、なぜだと考えられますか。本文全体の内容をふまえて、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 雑草の生きる自然界には、逆境のまったくない快適な場所などともとあり得ないから。

イ 逆境と呼べるような環境も、視点を變えてみれば雑草の生育に好都合な場所となり得るから。

ウ 進化の過程で知恵を獲得した雑草にとって、困難な環境こそが生き抜くにふさわしい場所であるから。

エ 他の植物との競争に弱い雑草にとって、厳しい環境は競争相手が少ない場所であるから。

問八 —— ⑥「私たちは道ばたにひっそりと花をつける雑草の姿に、自らの人生を照らし合わせてセンチメンタルになるかもしれない」とありますが、たとえばどのようなことですか。その例として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 厳しい環境の中でも花を咲かせる雑草を見て、いつの日か自分の夢もかなうのではないかと勇気づけられる。

イ 誰も気づかない道ばたに、たまたま美しい花を咲かせる雑草を見つけて、自分だけちよつと得したような気分になる。

ウ ひっそりと花を咲かせる雑草を見て、自分も周囲の人から評価されていないのではないかと暗い気持ちになる。

エ 仕事で失敗して落ち込んでいた時に、けなげに花を咲かせる雑草を見て、自分もがんばろうと前向きになる。

問九 —— ⑦「ピンチはチャンス」について、次の会話を読み、設問①・②に答えなさい。

先生 「ピンチはチャンス」って言葉は、雑草の生き方を見事に言い当てているけど、よく考えるとおかしな表現だと思わないかい。

Aくん はい。ピンチがチャンスだなんて、矛盾していると思います。

先生 そう、矛盾してるんだ。普通に考えれば、ピンチとチャンスはまったく逆の状況を指す言葉だし、チャンスがないからこそピンチって言うんだよね。

Bさん でも、先生。この言葉、よく聞きますよね。実際、私もこの言葉を聞いてがんばろうって思ったことがあります。

先生 そうなんだ。実はこの言葉は、矛盾したことを言っているんだけど、さらによく考えてみると、そこに真実が隠されている。だから、昔から多くの人がよく口にしてきたんだよ。

Aくん でも、先生。それって、たとえばどういうことを言っているんですか？

先生 うん、いい質問だね。では、先生が問題を出すから、君たちも一緒に考えてごらん。

たとえば、右利きのサッカー選手が右足を負傷したとしよう。選手にとっては、まさにピンチだ。ところが、この選手は、このピンチをチャンスに変えたんだ。さて、どうしたと思う？

Aくん うーん、難しいな。右足でボールを蹴れないとなると試合にも出られないわけだし、全然チャンスじゃないよお。

先生 じゃあ、ヒントをあげよう。一ヶ月後、怪我から復帰して再び選手としてプレイできるようになったとき、彼は、以前にも増して上手な選手になっていたんだ。試合でも大活躍さ。

Bさん あっ、わかったわ。  
1  
でしょ？

先生 正解。その通りだよ。

Aくん おー、そうか。なるほど、右足が使えないというピンチを逆手にとつてうまく利用したんだね。逆境によって強くなった雑草と同じだ。すごいやー！

先生 この「ピンチはチャンス」のように、一見すると矛盾した表現の中で、実は真実を述べているような言葉を「逆説」って言うんだけど、「逆説」はことわざの中にもいくつもあるんだよ。今度、君たちも調べてみてごらん。

Aくん はい、わかりました。ことわざかあ、いくつつ見つけられるかな。

Bさん わあ、おもしろそう。たしかにことわざには、昔の人の知恵が詰まっているわよね。

① 1 に入るBさんの会話を、自分で考えて作文しなさい。

② 次のことわざは、後日、AくんとBさんが調べてきたものですが、適当でないものが一つ含まれています。それはどのことわざですか。理由とともに答えなさい。

ア 急がば回れ

イ 負けるが勝ち

ウ 百聞は一見に如かず

エ かわいい子には旅をさせよ



二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ある夏の終りの夕方、A少年は路地の入口の土の上にB少年がうずくまって、茶色い犬の耳をひっぱっているのを見た。AとBは同級生で、小学五年生である。Bは二本の指で三角形にとがった耳の先をつまみ、すこしずつ引張る。それにつれて、犬の口の端が耳の方に釣上げられるようにすこしずつ開いてゆき、黄い歯が剥き出されてくる。老いた大きな犬で、寝そべった姿勢を崩そうとはしないが、かすかな唸り声が開いた歯の隙間から洩れてくる。

Bは耳を引張りつつける。唸り声はしだいに大きくなり、犬は吠え声といっしょにBの指に喰いつこうとする素振りになった。大きく開いた口の中の薄桃色が、一瞬あらわになった。

素早く、Bは指を引込めた。犬はうるさいものを払い除けるように二、三度首を振り、やがて顎を地面につけた元の姿勢に戻った。Bの顔に嬉しくてたまらぬ表情が浮び、また指を犬の耳に向って伸ばしてゆく。

「喰いつかれるぞ」

Bは顔を上げて、Aを見た。肥ったまろい顔に温和な笑いが浮び、

「本気じゃないのはわかってるもの。それに、ぼくが大好きだということを、こいつはよく知っているよ」

「そうだ」

Aは不意に思い付いて、声をあげた。

「今度の日曜に、一しよに犬屋に遊びに行かないか」

「犬屋って」

「そうさ、いろんな犬がいっぱいいるんだ。広い地面が、犬だらけなんだ」

「一しよに行こう」

Bはとっさにそう言った。

「ぼくも、一人じゃどうかとおもってたんだ。知り合いの家で、前から誘われていたんだけど、電車で一時間近くかかるところなんだ。いま、うちの柴犬が仔どもを産みに、そこへ行ってる。チャンピオンの雄が、そこにいるんだそうだ……」

Aが機嫌よく喋っているあいだに、Bの表情が暗くなった。そして、曖昧な調子でBが言った。

「そうだ。忘れていた。今度の日曜は用事があるんだ。Aちゃん、君ひとりで行ってくれ」

「なんだ、つまらない。一人じゃ仕方がないよ。それじゃ、この次の日曜にしよう」

(中略)

次の週が来るのを待ち兼ねて、AはBにたずねた。

「今度の日曜は、大丈夫だね」

「うん、それがね……」

Bは生返事をした。

「それが、といたつたつて、この前ちゃんと約束したじゃないか」

「うん。あと、二、三日たてば、はつきりするんだけど……」

Aが気色ばむと、Bは曖昧な調子で答えた。

家へ帰つて、Aが祖母にBの煮え切らぬ態度を訴えた。祖母はしばらく考えていたが、

「それはおまえ、Bさんは電車賃が無いのじゃないかしら」

「まさか」

反射的にそう答え、一層強く言った。

「だつて、そんな……」

それは、祖母の言葉に反対したというよりは、Aが祖母の言葉に不意を打たれたためである。

「あたしは、そうおもうね。ために、電車賃のことは心配しなくていい、といつて誘つてごらん」

祖母がそう言ったときには、Aはその言葉を正しいとおもっていた。Bが貧乏なことは、十分承知していた。だからこそ、Bを喜ばせようとおもつて、誘つたのだ。

一度だけ、Bの家でおやつを出してくれたことがある。顔色のわるい小柄なBの母が、ふかしたサツマイモを持って台所から出てきた。縁の欠けた小さな皿の上に人差し指くらいの太さの芋が、五本ほど載っていた。細い屑芋には、あちこちひよろと長い毛が生えていた。「こんなもの、おいしくないでしょうね」

Bの母親が、ちよつと憤つたような口調でそう言う前に、Aは狼狽に似た気持ちになっていた。Bの家にとつて、その屑芋が貴重なものであることが分つたからだ。

Aはいそいでその芋をつまみ上げ、口の中へ押込んだ。

犬屋へ遊びに行くことは、Bにとつても愉しいことにちがいない、とAは考えていた。犬屋へ行けば、歓待してもらえる筈だ。それに、遊園地へ行くのと違って、入場料も遊戯券を買う金も不要なのだ。そうおもつて、勢いこんでBを誘つたのだが、その場所へ行き着くための電車賃のことには、考え及ばなかつた。

BはAのほとんど唯一の友だちである。そのBの生きている世界について、自分はあまり知らないのではないか、という考えに襲われ、Aは

ひるんだ気持ちになった。

「やっぱり、今度の日曜に行こうよ。電車賃の心配はいらないよ」

翌日、AはBに言った。もつと婉曲な言い方を考えてみたが、結局、Aはそう言った。Bの曖昧な表情は、変らない。

「ね、そうしようよ。一しょに行こうよ」

重ねてAが言くと、Bは曖昧にうなずいた。

郊外電車に乗り換えて、三十分ほど走ると、沿線の風景は田と島と森になった。

小さい駅で降り、田舎道を訊ね訊ね十五分ほど歩くと、木の柵や金網で囲まれた一劃があった。それが、目的の犬屋で、近づくにつれて獣のにおいが強くなった。

応接間風の部屋に通され、彼らはしばらくの間、二人だけにされた。歓待の気配はまだ彼らのまわりにはなくて、Aは苛立った。ようやく戸が開いて、女中が盆を持って入ってきたとき、Aはおもわず首を伸ばして彼女の手もとに視線をそそいだ。盆には、塩センベイと白い餛飩が盛られてあった。

女中が姿を消すと、Aはいそいで餛飩を一つつまみ、口に入れた。

「あまい。君、あまいぞ」

Bも手をのばして、餛飩を口に入れて言った。

「うん、あまいや」

しかし、その言葉の調子には、わざとらしいところがあった。愉しい様子をする自分が自分の今日の役目だ、とBは自分に言い聞かせている。そんな気配をAは感じ取り、一層焦る気持が濃くなった。

⑤ 「はやく犬のいるところへ連れて行ってくれないかなあ」

AはBに気兼ねするように、そう言った。

⑥ 「うん、きつとおもしろいぞ」

BもAに気兼ねするように言った。

(中略)

犬たちは全部柵の中に入れられており、通路は閑散としていた。二人の少年だけが、やや手もちぶさたに、歩いていた。そのとき、一匹の黒い犬が、身をかがめるようにして向こうから歩いてきた。

Aは口笛を吹き、掌を上に向けて、手まねをした。千早号に躰をすりよせられ纏い付かれたあとなので、Aのその態度には自信と余裕が

滲み出ていた。

しかし、その黒い犬はAの方を見向きもせずに、同じ足取りで二人の傍を通り過ぎて行った。

Aは団扇を使うように上下に揺すぶっていた掌の動作を途中でやめ、そのままの姿勢で地面の上につくりつけたような形になった。乾いた堅い地面を踏む犬の蹠の規則正しい音が、異様に鋭くAの耳のなかで鳴った。

その音が不意に、聞こえなくなった。電気仕掛の機械人形に、ふたたび電流が通じはじめたように、Aは首だけうしろに深くまわした。すると、立止まっていた黒い犬も首だけまわしており、視線が合った。

その瞬間、黒い犬は勢いよく走り出した。晩夏の日射しに照りつけられて白く乾いた地面から、埃がくつきりと立昇った。黒い犬は、Aを目標にしているように、真一文字に走ってきた。首を深くまわした姿勢のまま、Aは走ってくる犬を眺めた。黒い犬は躰ごとAのふくらはぎに突当り、剥き出した歯をAの脚の肉に当てた。そして、そのまま、Aの傍を躰をこすりつけるようにして走り抜け、みるみるその姿は小さくなり、曲がり角で消えた。獣のにおいが、強くAの鼻を撲った。

噛みついた、というのとは少し違う、とAがおもったとき、Bの声が聞こえた。

「や、噛みついた」

Bは一瞬口を噤み、

「へんな犬だなあ」

と言いつづいて爆発的に笑い出した。その日はじめて聞いた、少年らしい明るい愉快そうな笑い声だった。

その笑い声は長くつづき、Aはむっとした表情で黙って佇んでいた。Bはようやく自分の笑い声に気付いた様子で、不意に口を堅く閉ざした。

Aは半ズボンの下の黒い長靴下をずりおろし、犬の歯の当たった部分を調べた。赤く歯型が付いていたが、皮膚は破れていなかった。

Aは必要以上に長い時間、その赤い歯型の上を指で撫でていた。すると、Bのいささか慌て気味の声が聞こえた。

「狂犬じゃないだろうね」

Aの身の上を心配して慌てているというよりは、自分の取った態度に慌てている。だから、その言葉は、いくらかわざとらしく聞こえた。

「噛まれたわけじゃないから、狂犬だとしても心配はないさ」

Aは不機嫌そうにそう言い、

「もう帰ろう」

とBを促した。

Aの不機嫌はしばらく続き、郊外電車の駅で切符を二枚買ったとき、その一枚を、ぎょうぎょうしくBに差し出した。

「ほら、君の切符」

そう言つて問もなく、今度はAが自分の態度に慌て出した。Bの機嫌を取る言葉をいくつかAは口に出し、やがて二人とも疲労して、すっかり無口になり、電車に揺られて坂の上下の彼らの家に向つた。

(吉行淳之介『子供の領分』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を書き改めたり、省略したりしたところがあります。

(注) \*気色ばむ……………おこつたようすを表情に現す。

\*狼狽……………あわてふためくこと。

\*欲待……………親切なもてなし。

\*一劃……………土地などのひと区画。

\*婉曲……………遠回しに表現するさま。

\*丁重……………応対が手厚いさま。

\*儀礼的……………単に形式を重んじる様子。

\*千早号……………犬の名前。

\*蹠……………足のうら。

\*狂犬……………狂犬病にかかった犬。

\*ぎょうぎようしく……………おおげさに。

問一 ————— ①「Bの顔に嬉しくてたまらぬ表情が浮び、また指を犬の耳に向つて伸ばしてゆく」とありますが、「Bの顔に嬉しくてたまらぬ

表情が浮」んだのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

A 指に喰いつかれそうになつたにもかかわらず、それを回避できた自らの素早さに「B」が満足感を覚えているため。

イ 犬が決して自分の指には喰いつかず、犬と気持ちを通じ合っているということ「B」が感じとっているため。

ウ 指にいくら喰いつこうとしても喰いつけない犬の様子を、「B」が心ゆくまでからかおうと思つているため。

エ 指に喰いつかれるかわからない緊張感を楽しみ、さらなるスリルを「B」が味わおうとしているため。

問二 ———— ②「Bの表情が暗くなった」とありますが、「B」は「A」のどの言葉を受けて「表情が暗くなった」のですか。その部分を十五字以上二十字以内で本文中からぬき出しなさい。

問三 ———— ③「Bの煮え切らぬ態度」とはどのような態度ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア「A」と本心では犬屋に行きたいのにそれを素直に表現することができない態度  
イ「A」のことを親しく思っているのか疎ましく感じているのかがわからない態度  
ウ「A」とできることなら一緒にいたくないということをそれとなくあらわす態度  
エ「A」と日曜日に一緒に犬屋に行けるのか行けないのかはつきりしない態度

問四 ———— ④「そんな……」とありますが、この「……」からは「A」のどのような思いが読み取れますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 電車賃も出せない家に生まれるなんてかわいそうじゃないか。  
イ 電車賃がないことを理由に断るなんてひどいじゃないか。  
ウ 電車賃さえもらえないような家があるのだろうか。  
エ 電車賃が言い訳になるなんて本当に考えているのだろうか。

問五 ———— ⑤「AはBに気兼ねするように、そう言った」——— ⑥「BもAに気兼ねするように言った」とありますが、この時の「A」と「B」の気持ちの説明として適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア この場と一緒に来て自分も心から愉しんでいるのだと、相手に思わせようとする気持ち  
イ 犬屋での遊びがとてもおもしろいものであることを、相手にわからせようという気持ち  
ウ 二人きりの雰囲気気まずく、早く犬のところへ行行って愉しみたいと思う気持ち  
エ 二人きりでいることが本当は苦痛でしかたないのだが、それを必死に隠そうとする気持ち  
オ 犬屋から歓待され、相手に愉しい気分になつてもらいたいという気持ち

問六 ———— ⑦「そのままの姿勢で地面の上につくりつけたような形になった」とありますが、ここから「A」のどのような心情が読み取れますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 黒い犬が纏い付いてくると期待していたが、自分に全く興味を示さず通り過ぎたことに動揺している。

イ 千早号だけでなく手招きをした黒い犬にまで素通りされ、シヨックのあまり立ち直れないでいる。

ウ 手招きしたにも関わらず黒い犬に無視をされ、思いあがっていた自分を振り返って反省している。

エ 自信を持って行った手招きが黒い犬に届かなかった様子を「B」に見られ、恥ずかしさでいっぱいになっている。

問七 ———— ⑧「Bのいささか慌て気味の声が聞こえた」とありますが、この時の「B」の心情の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 噛みつかれたとは思っていない「A」に「噛みついた」と言ったことで、「A」が不機嫌になったことに慌てている。

イ 突然黒い犬に噛みつかれたことで、「A」が狂犬病に感染してしまったのではないかと不安になり慌てている。

ウ 黒い犬に噛みつかれた「A」の気持ちにまで頭が回らず、愉快そうに笑い声をあげてしまった自分を振り返り慌てている。

エ 自分が笑い声をあげたことを反省し、「A」を氣遣ってかけた言葉がわざとらしく聞こえたのではないかと思ひ慌てている。

問八 ———— ⑨「Bの機嫌を取る言葉をいくつかAは口に出し」とありますが、「A」が「Bの機嫌を取る言葉」を口に出したのはなぜですか。その理由を五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問九 この小説の解説として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 裕福な家庭に生まれ育った「A」が、貧しい家庭環境の「B」に氣遣いをする中で「B」が本来の無邪気さを取り戻していくまでの様子が、とりわけ「A」の視点に寄り添いながらあざやかに描かれている。

イ それほど親しくはない間柄の「A」と「B」が、犬屋に行くという共通の楽しみを通じて徐々にその仲の良さを深めていくまでの様子が、「A」「B」双方の視点を交えながら生き生きとした文体で描かれている。

ウ 「B」を唯一の友達と思っている「A」が、鉛を持ち出したり犬をからかったりという悪事を共有することでさらに親密になるうとしていく様子が、特定の登場人物の視点に偏ることなく情熱的に描かれている。

エ 家庭環境のそれぞれ違う「A」と「B」が、互いに自分の置かれた環境や立場などからはみ出さないように氣遣い、その役割を演じながら接していく様子が、客観的な視点から落ち着いた文体で描かれている。

三 次の①から⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨から⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① この町はかつてギョコウであった。
- ② 地震のチヨウコウを見落とすな。
- ③ コナユキが降り積もる。
- ④ 車のオウライが激しい通りだ。
- ⑤ 古い絵画のシユウフク作業に携わる。
- ⑥ シカクを取得すると就職に有利だ。
- ⑦ 短期間で完成させるのはシナンの業だ。
- ⑧ 役員をサツシンして、会社の再建を図る。
- ⑨ なかなか気骨のある青年だ。
- ⑩ 穀物はしばしば主食として食べられる。
- ⑪ 多すぎるから二人で折半しよう。
- ⑫ 芸の肥やしになればと旅に出る。